

書評

丸山一男 著

人工呼吸の考えかた
いつ・どうして・どのように

浜松医科大学第二内科准教授

千 田 金 吾

良書であるかどうかは、読者の求めるものに対して、どの程度応えることができるかにかかっている。したがって、書かれている内容もさることながら、良書の判定は内容とは無関係に、読者のレベルに左右されるのは事実である。

本書は、学生のような全くの初心者が、呼吸管理の本として最初に手に取ると、この本の価値は十分に分からない可能性がある。一方、実際に呼吸管理が必要な患者さんに直面している医師にとっては、きわめて有用な本と感じられるはずである。それは人工呼吸に関して、何が問題点であるか、どのように対処すればよいか、またこれらについての考え方の基礎的

な背景はどこにあるのか、が見て取れるからである。

呼吸管理技術についてもう少しrefineしたい医師や医療関係者には間違いなく役立つ本である。基礎的なことが平易に解説されているが、単なる入門編の内容ではなく、応用のための基礎知識の整理が意図されている。

前述の通り安直な「How to」ものの内容ではないが、しかし初心者にとって役立つ点は、思考の過程を学ぶうえで良い入門書となりうることである。暗記の知識では応用がききにくいことの一端を、学び取ることができるものと思われる。

多くの挿入図を駆使し、図表の

解説を中心に話題を展開している点は、全体に分かりやすさをもたらしている。人工呼吸器のパネル上の波形の詳細な検討は、波形からここまで分かるのかと新鮮な思いを受ける。時定数の概念は初心者にはなかなか理解しにくい厄介なものであるが、時定数の項目での解説は明解であり、臨床的な意義が明らかにされている。

人工呼吸管理は、呼吸器科医や麻酔科医に限定される技術ではなく、ジェネラリストとして必須の要件であろう。基礎と臨床を違和感なく繋ぐ本書は、呼吸管理を磨くにあたり非常に役立つものと思われる。

このように随所に人工呼吸管理のパールが見て取れる。これらの内容が面白いという「そこそこの手応え」を感じられれば、読者のレベルは「そこそこに達した」と判断できるともいえる。

〔A5判 288頁 2009年7月
発行 定価3,360(本体3,200
円+税5%) 南江堂刊〕